

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	今津 孝次郎
最終学歴	学 位	専門分野
京都大学大学院教育学研究科博士課程 (単位取得満期退学)	博士 (教育学, 名古屋大学)	教育学, 教育社会学, 学校臨床社会学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

教育学部が完成年度を無事終えることができ、次の段階に向けてさらに独自の教育を具体的に実現していくのが最大の課題である。子どもの命の成長を支援する保育士と幼稚園・小学校の教員にとって求められる資質能力は、「人間力」である。本学のスクールモットーである「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を真正面から受け止めて提起する「人間力」とは、表現力や感性を中核にしつつ対人関係力や忍耐力、探究心そして知力などの諸能力や態度を総合した総合的な力を言う。この総合的な「人間力」を培うためのさらなる環境整備に努めることが目標である。

(計画)

- ①「サービス・ラーニング実習」が授業化・単位化され3年目に入る。この新たなカリキュラムが「プレ保育・教育実習」として成功するように、サービス・ラーニング委員会を中心に全面的に取り組んでいきたい。
- ②学生のなかにはわずかではあるが、過少単位や進路の揺らぎ、実習途中取り止めなど、難しい課題を抱えたケースがある。これらについては個別に丁寧に指導を施して、卒業を迎えさせる努力を払う。そしてそれらのケースを通じて、今後とも学生指導上必要な一般的な指導法の工夫点を見つけ出す。
- ③初等教育コースの第1期生2人が小学校教員採用試験に合格した。いっそう着実に成果をあげることが、学生本人にとっても、また教育学部の評価にとっても切実な課題である。すでに教職支援センターとも連携しながら強化対策を積み重ねているが、さらに教育学部全体としてもさらに支援していきたい。
- ④久しぶりに総合演習を担当することになった。総合演習の教育課題と独自の教育方法を開発する。
- ⑤昨年度の学部FDとして、「演習」授業改善を集中しておこなうことができた。その成果を踏まえて、本年度はサービス・ラーニングに続く教育学部の次の独自性を創造できるようなFD活動を展開できればと願っている。

○担当科目 (前期・後期)

(前期) 教育原理、生徒・進路指導の理論と方法、教育実習Ⅰ事前事後指導、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、教育実習Ⅰ (幼稚園)

(後期) 教職概論 (幼・小)、多文化理解教育、教育社会学、教職実践演習 (幼・小)、総合演習Ⅱ、
専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

文献・資料の輪読 (音読) をさらに定着させ、国語力の向上にも寄与すること。

○作成した教科書・教材

サービス・ラーニング委員会編『「サービス・ラーニング」ハンドブック』第5版、愛知東邦大
学教育学部、2019年2月

○自己評価

・サービス・ラーニングが5年目 (授業化して3年目) を終え、選択科目とはいえ、前期はほと
んどの学生が履修し、後期は特に熱心な半分ほどの学生が引き続き参加し続けている。サービ
ス・ラーニング先のリストも固まり、全体授業とサービス・ラーニング実習の配分や評価法など、
方法論も確定して、ようやく最初の段階が完成したという印象である。次は2年次以降の学生に
ついて、さらにレベルアップした授業形態を開発することが目標である。

・多人数の必修授業で文献・資料の輪読 (音読) がどれだけの効果を上げているかについては、
今津孝次郎「古典に親しむ楽しさ」『邦苑』No. 401 (2019年3月) で報告した。

・総合演習では「文献紹介」をねばり強く推進することができ、大学での学び方の手法をかなり
習得できたのではないかと思う。次年度も同じ課題を追求していきたい。

・教職支援センターが試みに運営した前期の「教採対策特別講座」で、校長経験者による筆記・
集団面接・個人面接を4年生対象に実施することができた。また集団面接 (集団討議) は早期か
ら可能であると判断し、後期に1~3年生を対象にして、これも試みにおこなったところ、学生
は大いに啓発を受けることができた。もっと回数を増やしてやってほしい、との要望が寄せられ
たほどである。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

昨年から継続するテーマと、本年度の新規テーマが以下の三つである。

- ①新規「社会人のリカレント教育の開発」
- ②継続「教師教育の研究」の一環として、「チーム学校」の検討
- ③継続「多文化理解の教育プログラム開発」

○目標・計画

(目標)

①科研「社会人を対象にした教員養成の研究」の4年目延長した最終年度では、3年目に引き続
き国内での本格的な調査を実施し、社会人を対象にした教員養成および一般市民の大学入学に
関する基本的課題を浮き彫りにした。そのなかで、リカレント教育がなぜ日本で盛んにならな
いのか、という根本的な疑問を抱くに至った。キャリア変化に関する文化的特徴などを探る必
要があると感じ、科研仲間と引き続き総合的研究を展開する。

②20年ぶりに『新版 変動社会の教師教育』(名大出版会) を刊行し、教師教育研究に一区切り
をつけたが、関連する研究テーマが浮かび上がった。まずは中教審答申で提起された「チーム
学校」の検討である。

(計画)

- ①研究仲間と、リカレント研究の計画を具体的に立案する。
- ②「チーム学校」に関する中教審答申など書類の読み解きからはじめたい。
- ③一般にはあまり知られていない「多文化保育」がようやく学生の間でも話題になるようになった。昨年度も5人の専門演習受講の4年生と共に、外国人園児の多い保育園でフィールドワークをおこなった。さらに新たな保育プログラムの具体化をはかりたい。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・[共著] 愛知東邦大学地域創造研究所編『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』唯学書房、2019年2月、全110頁
- ・今津孝次郎『新版 変動社会の教師教育』名古屋大学出版会、2017年、全360頁
- ・今津孝次郎監修・著、子どもたちの健やかな育ちを考える養護教諭の会編著『小学校保健室から発信!先生・保護者のためのスマホ読本』学事出版、2017年、全118頁
- ・今津孝次郎『学校と暴力-いじめ・体罰問題の本質-』平凡社新書、2014年、全239頁
- ・今津孝次郎監修、金城学院中学校高等学校編著『先生・保護者のためのケータイ・スマホ・ネット教育のすすめ-「賢い管理者」となるために』学事出版、2013年、全95頁
- ・今津孝次郎監修・著、金城学院中学校高等学校編著『中高生のためのケータイ・スマホハンドブック』学事出版、2013年、全96頁
- ・今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波新書、2012年、全214頁
- ・今津孝次郎『〈ワードマップ〉学校臨床社会学-教育問題の解明と解決のために-』新曜社、2012年、全249頁

(学術論文)

- ・久野千津・今津孝次郎「新学習指導要領とカリキュラム・マネジメント」『東邦学誌』第47巻第2号、2018年12月
- ・今津孝次郎『「チーム学校」の光と影』『中部教育学会紀要』第18号、2018年6月
- ・今津孝次郎・加藤潤・白山真澄・田川隆博・長谷川哲也・林雅代「現職教員の潜在的学びニーズ-大学への『社会人入学』に関する質問紙調査を通じて-」『東邦学誌』第47巻第1号、2018年6月
- ・川崎勝彦・今津孝次郎「秋の虫取りによる『保育内容(環境)』学習の試み-平和公園のフィールドワークから-」『東邦学誌』第46巻第1号、2017年6月
- ・今津孝次郎・加藤潤・白山真澄・田川隆博・長谷川哲也・林雅代「大学における現職教員の学び直しに関するニーズ-2015年度予備調査の結果から-」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No.26、2017年3月
- ・今津孝次郎「教員養成における『大学中心』と『学校現場中心』-『サービス・ラーニング』と『学校インターンシップ』-」『東邦学誌』第45巻第1号、2016年6月
- ・今津孝次郎「改訂 情報メディア社会の生徒指導」『教員免許更新講習・印刷教材集』(ラジオ)放送大学、2015年7月
- ・今津孝次郎「改訂 生徒指導のサポートネットワーク」『教員免許更新講習・印刷教材集』(ラジオ)放送大学、2015年7月

- ・今津孝次郎「学校臨床社会学の『介入参画』法」『教育学研究』第78巻第4号、2011年12月
- ・今津孝次郎「教育専門職博士課程 EdD の可能性と課題」『日本教師教育学会年報』第20号、学事出版、2011年
- ・今津孝次郎「生徒指導とスクールソーシャルワーク」『教員免許更新講習・印刷教材集』放送大学、2011年7月
- ・今津孝次郎「情報社会の生徒指導」『教員免許更新講習・印刷教材集』放送大学、2011年7月
(学会発表)
- ・田川隆博・加藤潤・今津孝次郎・白山真澄・長谷川哲也・林雅代「現職教員の潜在的学びニーズー大学への「社会人入学」に関する質問紙調査を通じてー」日本教育社会学会第69回大会、一橋大学、2017年10月21日
- ・今津孝次郎・田川隆博、加藤潤、白山真澄、長谷川哲也、林雅代「大学への社会人入学に関するニーズー一般市民への質問紙調査の結果からー」中部教育学会第66回大会、福井医療大学、2017年6月17日
- ・今津孝次郎・田川隆博「大学への社会人入学の促進要因と抑制要因」日本教育社会学会第68回大会、名古屋大学、2016年9月17日
- ・今津孝次郎・田川隆博・長谷川哲也「大学における現職教員の学び直しに関するニーズー予備調査の結果からー」(中部教育学会第65回大会、中部大学、2016年6月25日)
- ・今津孝次郎「私立大学は教員養成制度の大改革にどう立ち向かうのか」全私教協「2015年度教職課程運営に関する研究交流集会」シンポジウム「今後の教員養成政策と私立大学教職課程の課題」(金城学院大学、2015年11月7日)
- ・長谷川哲也・菅野文彦・今津孝次郎「教師を目指す学生による『学校現場体験』の再検討ー静岡大学と愛知東邦大学の実践を事例としてー」(日本教師教育学会第25回大会、信州大学、2015年9月20日)
- ・今津孝次郎「教員養成における『経験学習』法としての『サービス・ラーニング』ー愛知東邦大学教育学部の試みー」教員養成における新方法開発シンポジウム、静岡大学教育学部、2015年3月26日
- ・今津孝次郎「体罰問題の教育言説論的考察」日本教育社会学会第66回大会、松山大学、2014年9月14日)
- ・今津孝次郎「移民時代の異文化理解と自文化認識」名古屋多文化共生研究会シンポジウム「外国につながる子どもたちのために今何ができるか」、名古屋市立大学、2014年7月26日
- ・今津孝次郎「『勉強』と『学び』」シンポジウム：学びに向かう子どもを育てる」日本教育会愛知県支部「第34回教育問題研究会」、愛知県女性総合センター、2014年7月24日
- ・今津孝次郎「名古屋大学のEdDプログラムの成果と課題ーPhDとの相違を中心に」愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学シンポジウム、愛知教育大学、2014年3月9日
- ・今津孝次郎「教師の『資質・能力』概念の再検討ー六層構成の視点からー」日本教育社会学会第64回大会、同志社大学、2012年10月27日
- ・今津孝次郎「外国人児童生徒教育の実践的研究課題ー学校臨床社会学の立場からー」日本教育学会第71回大会・公開シンポジウム「グローバル化時代の教育と職業ー移民の青少年におけるキャリア形成をめぐるー」、名古屋大学、2012年8月25日

- ・今津孝次郎「臨床社会学の『介入参画』法」関西社会学会第 63 回大会、皇學館大学、2012 年 5 月 27 日
- ・今津孝次郎「教育専門職博士 EdD の可能性」日本教育社会学会第 63 回大会、お茶の水女子大学、2011 年 9 月 24 日

(特許)

- ・無し

(その他)

< 事典項目 >

- ・今津孝次郎「教職専門性の変容」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、2018 年
- ・今津孝次郎「ライスステージの変化とライフコース」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、2018 年
- ・今津孝次郎「文化遅滞 (W・F・オグバーン)」作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』ちくま学芸文庫、2011 年 (初版 筑摩書房、1986 年)

< 評論 >

- ・今津孝次郎「古典に親しむ楽しさ」『邦苑』NO. 40、愛知東邦大学後援会、2019 年 3 月
- ・今津孝次郎「高大接続を目指す『キャリア教育』－『ボランティア』から『サービス・ラーニング』そして『インターンシップ』へ」名古屋大学高大接続研究センター「レクチャーシリーズ」、2018 年 1 月
- ・今津孝次郎「< 巻頭言 > 教師教育にとって『大学』と『学校現場』との関係を問い直す」『教育展望』教育調査研究所、2017 年 10 月号
- ・今津孝次郎「私の教育学部 50 年－大学の春夏秋冬－」『京都大学教育学部同窓会会報』第 33 号、2017 年 3 月
- ・今津孝次郎「大学の社会人獲得－土日授業・学費軽減を－」『日本経済新聞』、2016 年 11 月 7 日付
- ・今津孝次郎「多文化地域社会の保育を考える」「フレンズ・TOHO」会報『みどりの風』第 40 号、2016 年 2 月 24 日
- ・今津孝次郎「学校現場ネットワークと教師の『同僚性』」『教職大学院ニュースレター』79 号、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻、2015 年 12 月 23 日
- ・今津孝次郎「『いじめ防止対策推進法』をどう受け止めるか」『月刊高校教育』2014 年 5 月号、学事出版
- ・今津孝次郎「いじめ認識の弱点を乗り越える－『事件対処型』発想と『教育対応型』発想－」『教育と医学』2013 年 11 月号、慶應義塾大学出版会
- ・今津孝次郎「学校の体罰防止－『懲戒』のガイドライン作れ－」『朝日新聞』[私の視点]、2013 年 2 月 23 日
- ・今津孝次郎「< 巻頭随筆 > いじめ問題の基礎知識」『教育と医学』2013 年 2 月号、慶應義塾大学出版会
- ・今津孝次郎「ケータイの賢い管理責任者となる－金城学院中高校 PTA 研修会の試み－」『月刊高校教育』2012 年 8 月号、学事出版
- ・今津孝次郎「< 巻頭随筆 > 子どもが地域と出会う場を創り出す学校」『教育と医学』2012 年 2 月

号、慶應義塾大学出版会

<書評>

- ・今津孝次郎「志水宏吉・高田一宏編著『マインド・ザ・ギャプー現代日本の学力格差とその克服ー』大阪大学出版会、2016年4月、『教育社会学研究』第100集、2017年7月
- ・今津孝次郎「自著『学校と暴力』の書評に答えて」（書評リプライ）、『教育社会学研究』第98集、2016年6月
- ・今津孝次郎〔図書紹介〕「アンディ・ハーグリーブス（木村優・篠原岳司・秋田喜代美 監訳）『知識社会の学校と教師ー不安定な時代における教育ー』金子書房、2015年」、『教育学研究』第82巻第3号、2015年9月
- ・今津孝次郎「酒井朗『教育臨床社会学の可能性』勁草書房、2014年」、『教育展望』2014年11月号
- ・今津孝次郎「自著『教師が育つ条件』の書評に答えて（書評リプライ）」、『教育社会学研究』第93集、2013年12月
- ・今津孝次郎「副田義也『教育基本法の社会史』有信堂高文社、2012年」、『社会学評論』64巻1号、2013年6月
- ・今津孝次郎「人間関係の解明に向けた生涯発達社会学的視点」【書評シンポジウム】高橋恵子『人間関係の心理学ー愛情のネットワークの生涯発達ー』東京大学出版会、2010年、『児童心理学の進歩 2013年版、金子書房、2013年6月
- ・今津孝次郎「志水宏吉〔編〕『格差をこえる学校づくりー関西の挑戦ー』大阪大学出版会、2011年」、『教育社会学研究』第90集、2012年6月
- ・今津孝次郎「自著『人生時間割の社会学』」【書評シンポジウム】・「著者による原著の紹介」「書評にこたえて」（小嶋秀夫・岡本祐子・菅原育子・上野千鶴子・各氏の書評へのリプライ）『児童心理学の進歩』2011年版、金子書房、2011年6月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成 26～29(2014～2017)年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究課題名：「社会人を対象にした教員養成プログラムの開発」研究代表者：今津 孝次郎（研究分担者：長谷川哲也・他 4名）交付総額：4,550,000円

（3年間だったが、課題が残ったので、平成 29（2017）年度まで1年間延長した）

○所属学会

日本教育学会、日本教育社会学会、日本教師教育学会、中部教育学会、関西社会学会

○自己評価

- ・「社会人のリカレント教育の開発」については、5人の研究仲間とすでに4回の研究会を持ち、平成 31年度基盤研究（C）（一般）の研究計画書「リカレント教育の抑制要因に関する文化的・制度的分析」（研究代表者：加藤潤）を作成して共同申請した。
- ・「教師教育の研究」の一環として、「チーム学校」の検討をおこない、『中部教育学会紀要』第18号に『『チーム学校』の光と影』と題した論文が掲載された。その後は、「チーム学校」だけでなく、近年の教育政策に関するキーワード（児童虐待、体罰、いじめ、学校安全など）をめぐる諸言説の検討に発展したので、次年度に向けて一冊にまとめる計画で執筆を続けている。
- ・「多文化理解の教育プログラム開発」については、これまで自由に参観が可能であった、名古

屋市内最大の外国人園児を擁する公立保育園への訪問について条件が厳しくなった関係上、訪問しづらくなったので、フィールドワークをおこなうことが困難になった。その代わりに、2019年4月より外国人労働者の受け入れ拡大が急遽、国会で審議される状況になったので、この目の前の動きをいかに受け止めていくか、新聞報道やテレビドキュメントなどを資料にして、共に考える「多文化理解教育」の授業を展開した。学生はアルバイト先でさまざまな外国人労働者と接しており、身近な関心をいかに国全体の一般的な課題と結び付けていくか、互いの経験を相互に対話させていく方法もプログラムに取り入れられてよいのではと考える。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

学部長職を終え、教職支援センター長として、センター業務をさらに充実させることが役割である。

(計画)

- ①教職支援センター主催で教採合格強化講座を立ち上げる。
- ②他大学の教職センターとの交流をはかる。

○学内委員等

地域連携委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

- ・教職支援センターが試みに運営した前期の「教採対策特別講座」で、校長経験者による筆記・集団面接・個人面接を4年生対象に実施することができた。また集団面接（集団討議）は早期から可能であると判断し、後期に1～3年生を対象にして、これも試みにおこなったところ、学生は大いに啓発を受けることができた。もっと回数を増やしてやってほしい、との要望が寄せられたほどである。そこで、次年度も実施する予定である。また、一時的な特別講座でなく、体系的で、より学校インターンシップに近い「東邦プロジェクト-教職の実践的探究-」の構想案を策定した。この案を実現するのが次年度の課題である。
- ・教職センターの環境を調べるために、6月4日に南山大学、6月25日に中部大学の各教職センターを本学センター関係者6～7人で訪問して、施設などを見学すると共に、担当者から詳しい話を聞くことができた。本学のセンターの環境整備をするうえで啓発を受けた。
- ・地域連携委員会では、新たなコンセプトの下での公開講座規程の改訂について、基本的な考え方を問題提起するレポートを作成した。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

サービス・ラーニングを通じて学校・園などへの訪問を進めるなかで、名東区内のいくつかの小学校、幼稚園、保育所、児童福祉施設などとの連携がすっかり定着するとともに、名東区役所や名東文化小劇場、名東図書館との連携も具体的なプロジェクトを介して生まれた。そうした地域連携をさらに深めていく。

(計画)

- ①サービス・ラーニングの成果も報告しながら、学校・園など諸機関の行事の支援を進める。
- ②名東区子育て支援ネットワーク協議会の正式メンバー（大学機関としては初）であり、独自の公開コミュニティカレッジ講座も開設しているので、さらに地域の社会貢献をはかる。
- ③名東文化小劇場から依頼された「あつまれ! KIDS たいけん」を引き続き開催するとともに、名東図書館の「子ども広場」をさらに継続していく。

○学会活動等

科研費による研究期間が終了したこともあり、本年度は特に学会活動はおこなっていない。

○地域連携・社会貢献等

- ・愛知県いじめ問題調査委員会で委員長役を務めた。この役目は次年度も継続する。
- ・松本大学外部評価委員会委員長を務めた。この役目は次年度も継続する。

○自己評価

①～③の計画通り、地域との連携をさらに深めている。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

1990年代末から今日まで20年余りにわたって継続している教育言説研究に関する諸論考を一冊にまとめる作業を10月からおこなっており、原稿を8割方書き終えて、3月中には草稿がすべて出来上がる見通しである。

VI 総括

- ・教育活動では、サービス・ラーニングを5年間続けてきて、そのスタイルを確定することができた。地域創造研究叢書 No. 30『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究中間』はその中間総括であり、本書の発行が本年度最大の成果である。
- ・研究活動では、20年に及ぶ教育言説論集の集大成原稿がおおよそできあがりつつあるのが、最大の成果である。
- ・地域貢献では、名東区子育て支援ネットワーク連絡会への参加が4年間続き、本年度でひとまず委員としての役目を終えて、次の委員への引き継ぎをおこなったところである。
- ・社会貢献では、愛知県いじめ問題調査委員会委員長として、いじめ問題への対応の審議の取りまとめをおこなった。また、学部構成が共通しているということで、松本大学より依頼され、外部評価委員会に参加し、委員長を務めた。啓発される点が多々あった。

以 上